

高校野球における自己調整学習能力の変容：選手の監督コンピテンシー認知からの検討

平野太一¹⁾ 梅澤秋久²⁾

1) 横浜国立大学大学院教育学研究科 2) 横浜国立大学教育学部

Transformation of self-regulated learning ability in *Kokoyakyu* (high school baseball in Japan).
: Focus on manager competency.

Taichi HIRANO · Akihisa UMEZAWA

1. 研究背景と目的

(1) 運動部活動の現状

我が国における部活動は、時代背景に応じた教育的効果を期待され、様々な変遷を経て現在に至っている(今宿ら, 2019)。平成30年に告示された高等学校学習指導要領において、部活動は「スポーツや文化、科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等、学校教育が目指す資質・能力の育成に資するもの」(文部科学省, 2018)と位置付けられている。中でも運動部活動について、スポーツ庁は「生徒の多様な学びの場として、教育的意義が大きい」(スポーツ庁, 2018)と述べており、これまでも多くの研究によってその教育的効果が実証されてきた(白松, 1995; 上野・中込, 1998; 角谷, 2005; 竹村ら, 2007; 岡田, 2009)。

しかし、2012(平成24)年に大阪市立桜宮高校バスケットボール部において、顧問からの体罰が原因で当時3年生の主将部員が自宅で自殺を図り、命を絶つという凄惨な事件が起こった。部活動、特に運動部活動においては、教育的効果として正の側面がある一方で、以前から指導者の体罰など負の側面も指摘されていた(高田ら, 1987; 安田, 1999; 高橋・久米田, 2008; 岡田, 2009; 富江, 2009)。この事件による部員の死が、体罰問題に関する研究・議論が進めるなど国を大きく動かし、教育関係者の指導行動への意識を変える契機となった(長谷川, 2013; 梅澤, 2014; 松田, 2015; 長谷川, 2016; 大峰, 2019)。事件の翌年には文部科学省から「運動部活動での指導のガイドライン」(文部科学省, 2013)が策定され、体罰の根絶とともに、適切な指導方法やコミュニケーションの充実等により、生徒の意欲や自主的、自発的な活動を促し、生徒が主体的に自立して取り組む力の育成が求められている。さらに、2018年にはスポーツ庁から「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」(スポーツ庁, 2018)が策定されるなど、国を挙げて運動部活動の在り方が見直されている。

(2) 高校野球の現状と課題

運動部活動の1つでありながら、国民的人気を誇るスポーツが高校野球である。しかし、2021年5月時点で部員数が7年連続で減少している(朝日新聞デジタル, 2021)。その背景には2000年代以降、他のスポーツの発展に加え、高校野球指導者の暴力的指導や旧来から根強く残る指導者主導型の指導が原因だと考えられる(広尾, 2016)。実際、2019年度には日本学生野球協会関係者が「厳重注意などの処分も含め、本年度は1000件に迫る勢い」(nikkansports.com, 2020)と述べ、2020年度には体罰・暴言による処分が20件以上挙げられるなど、高校野球では未だに暴力や暴言による指導者の処分が後を絶たない。山崎(2020)は高校野球における体罰について、「教育者である監督によ

って、技術的な理由から行われている事例が多く、また、人目を気にせずに体罰が行われていること」を明らかにしている。元永（2020）は『暴力は許されない』と理解していながら、懐に暴力を忍ばせて指導を行う監督やコーチがいる」と述べ、未だ改善しない高校野球指導の現状を憂いている。また、大峰・友添（2014）も高校野球における勝利追求の責務責任と体罰を行使しない責務責任の両立の必要性について言及している。

藤井ら（2019）は、指導者主導型の指導から生徒自ら考え行動する選手主導型の指導法への転換期であると認知されながらも、なお指導者主導型の指導が展開される原因について「主体的な活動の有用性を認めつつも、そのような活動が選手のパフォーマンスを向上させることには懐疑的である」点と「選手の自主性を引き出すための具体的な指導法が認識されていない」点を挙げている。

以上より、高校野球の社会に及ぼす影響力から鑑み、高校野球における選手の主体性を育むための指導者像を検討する必要があると考えられる。

（3）高校野球における監督コンピテンシー

OECD DeSeCo (Rychen & Salganic, 2003) 等を契機とし、世界各国でコンピテンシーに基づく教育改革が進められている。日本においても、現行の学習指導要領（2017；2018；2019）ではコンテツベースからコンピテンシーベースへの転換がなされたと言われている（石井, 2015）。

コンピテンシーとは、人間の表面に現れる「行動」だけでなく、個人の内側にある動機付けや知識・人格等を含む包括的な概念であり（岩脇, 2007）、旧来の能力概念では説明できなかった部分を明瞭にし、成果や業績と関連させることができる（古川, 2002）。スペンサー・スペンサー（2001）は、コンピテンシーを「効果的あるいは卓越した業績を生む原因として関わっている個人の根源的特性」と定義し、コンピテンシーを抽出する研究方法を明らかにしている。

海外ではコンピテンシーを用いたスポーツ指導者研究が進んでおり（Myers et al., 2006, 2010；Phillips and Jubenville, 2009；Malete et al., 2013）、日本国内においても僅少ではあるが、コンピテンシーに着目した研究が見られ始めた（富田, 2006；長澤, 2017）。高松・山口（2015）は、暴力を用いた指導からの脱却を目指した新たな指導スタイルの確立に向け、コンピテンシーを「チームおよび選手の学びやパフォーマンスに影響を及ぼす個人の行動特性」と定義し、高校野球における監督特有のコンピテンシー構造を報告している。その結果、同構造に精神主義的、勝利至上主義的な要素はみられず、選手との人間関係づくりや選手が主体となって行動できるよう支援する指導スタイルの重要性が示された。

（4）自己調整学習への期待

選手の主体性に関する研究に際し、本研究では「自己調整学習」に着目する。自己調整学習とは「自らの学習プロセス（予見・遂行・自己内省）に対して、メタ認知・動機づけ・行動の面で自己調整の機能を働かせながら積極的に進められる学習」と定義されており（Zimmerman, 1989）、主体的に学習を行うための有用な手立てとして広く活用されてきた。また、スポーツ場面においても、自己調整学習は選手をより優れたパフォーマンスレベルへ到達させるために有効とされ（Toering et al., 2009；Kitsantas and Kavussanu, 2011；Dora et al., 2017）、日本においても幾留ら（2017）によって「スポーツ版自己調整学習尺度」が開発されるなどし、注目され始めている。

Education2030 (OECD, 2018) において、2030 年に向けて子どもたちが未来を作り上げていくための「変革を起こす力のあるコンピテンシー」を育成するには、見通し (Anticipation)、行動 (Action)、振り返り (Reflection) の連続した AAR の過程を通じて学習されるべきであると提言されている。

ここで述べられている AAR とは、自己調整学習と同義であると考えられる。つまり、自己調整学習とは、VUCA（不安定、不確実、複雑、曖昧）が急速に進展する世界を生き抜く生徒たちにとって重要な学習であり（OECD, 2018）、学校教育の一環として行われる運動部活動においても同様に育まれるべき資質・能力である。ところが、国内のスポーツ場面における自己調整学習に関する研究は大学生や社会人選手を対象にした研究がほとんどであり（高城ら, 2019; 相川ら, 2020; 藤井ら, 2020）、高等学校の運動部活動を対象にした研究は僅少である。その中で、藤井ら（2019）は、高校野球における自己調整学習能力とチーム及びチーム内の競技レベルとの関係を横断的に研究し、自己調整学習能力がチーム内の競技レベルの高低を決定付ける 1 つの要因であることを明らかにしている。しかし、高校野球における自己調整学習能力の変容に着目した研究は散見されない。

（５）研究目的

以上のとおり、高校野球において選手の自己調整学習能力を育む指導が希求されているものの、その変容や要因を追った研究は散見されない。また、選手の自己調整学習能力と監督コンピテンシー認知との関連を明らかにした研究も存在しない。

そこで本研究では、高校野球における選手の監督コンピテンシー認知が自己調整学習能力の変容に及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

（１）調査対象・調査期間

調査対象者は、事前に了承を得られた A 県内 20 校の高等学校硬式野球部員 875 名とした。本研究に係るアンケートを秋季大会前の 2020 年 8 月（以下、「チーム発足時」）と春季大会後の 2021 年 5 月（以下、「チーム成熟期」）に配布し、各校指導者の指示のもと実施した後、返信用封筒での返送を依頼した。有効回答は 18 校 730 名（83.4%）であった。なお、アンケートは無記名式で行った。

（２）調査内容

① 選手の自己調整学習能力（表 1）

選手の自己調整学習能力を評価する指標として「スポーツ版自己調整学習尺度」（幾留ら, 2017）を使用し、回答は全て 5 件法で行った。なお、本調査は選手の自己調整学習能力の変容を見取るため、チーム発足期とチーム成熟期に実施した。

表 1 「スポーツ版自己調整学習尺度」の因子ごとの質問例

因子名（項目数）	質問例
計画（7）	私は、自分の課題を克服するための練習をきちんと計画する
自己効力感（7）	一生懸命取り組みさえすれば私はどんな困難な課題でも克服することができる
セルフモニタリング（4）	私は、練習中に、自分の課題を確認しながら行う
エフォート（6）	私は、たとえ難しい課題であってもやり続ける
評価・内省（13）	私は、次の練習に生かすために自分の練習内容を振り返る

など 5 因子 41 項目（Lie スケール 4 項目含む）

② 選手の監督コンピテンシー認知（表2）

選手が監督の指導者行動や考え方をどのように認知しているのかを調査するため、高松・山口（2016）に倣い、「高校野球における監督のコンピテンシー尺度」（高松・山口，2015）の質問項目に「私の監督は」と前置きを加え、選手の監督に対する評価をたずねる文に修正して実施した（例：私の監督は、選手の気持ちを理解しようとしてくれる）。回答は全て7件法で行った。なお、本調査はチーム成熟期のみで実施した。

表2 「高校野球における監督のコンピテンシー尺度」の因子ごとの質問例

因子名（項目数）	質問例
信頼関係（6）	私の監督は、選手の気持ちを理解しようとしてくれる
観察力（4）	私の監督は、選手の性格を把握してくれる
生活指導（3）	私の監督は、挨拶の重要性を教えてくれる
自律性支援（4）	私の監督は、選手自身で探す部分を残してくれる
後援関係（3）	私の監督は、保護者と良好な関係を築いている
技術・戦術指導（4）	私の監督は、練習中のプレーに関して、具体的なアドバイスをくれる

など6因子24項目

③ 選手のチーム運営決定権認知（表3）

チームのあらゆる活動（目標設定、活動計画、ミーティング等）における運営決定権をそれぞれ選手と指導者のどちらが握っていると選手が認識しているのかを調べるため、藤井ら（2019）が使用した「選手と指導者のどちらがチームの運営決定権を握っていると認識しているか」の調査を実施した。回答は全て5件法で行った。なお、本調査はチーム成熟期のみ実施した。

表3 「選手と指導者のどちらがチームの運営決定権を握っていると認識しているか」の質問例

質問例
チームの目標は誰が決めますか？
練習メニューは誰が決めますか？
チームへの問題提起（練習の改善案や効率化案）は誰が行いますか？

など29項目

（3）分析方法

分析はIBM SPSS Statistics Base 28.0を使用し、有意水準は5%未満とした。

3. 研究結果

(1) 自己調整学習能力の変容と選手の監督コンピテンシー認知の2要因分散分析

選手の監督コンピテンシー認知の得点を3分位法にて低・中・高群に群分けし、チーム発足時・チーム成熟期における自己調整学習能力の変容について2要因分散分析を行った。結果は表4のとおり、交互作用が認められた ($F(2,727) = 20.639^{***}$)。また、図1のとおり、監督コンピテンシー認知高群は自己調整学習能力が有意に高く変容しており ($p < .001$)、中群には有意差はなく、低群は有意に低くなっていた ($p < .001$)。

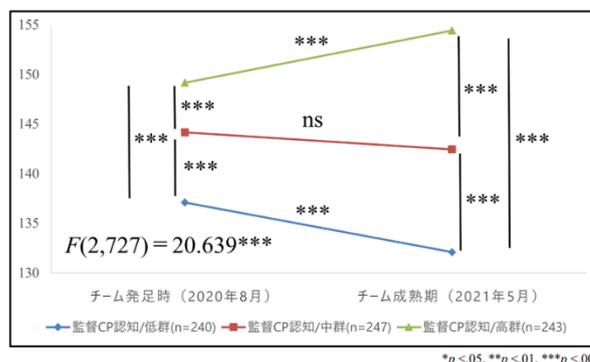


図1 自己調整学習能力の変容と選手の監督コンピテンシー認知の2要因分散分析

表4 自己調整学習能力の変容と選手の監督コンピテンシー認知の2要因分散分析

選手の監督CP認知	チーム発足時			チーム成熟期			主効果F値		交互作用F値
	低群 (n=240)	中群 (n=247)	高群 (n=243)	低群 (n=240)	中群 (n=247)	高群 (n=243)	選手の監督CP認知	自己調整学習能力	
自己調整学習能力	137.104	144.178	149.177	132.100	142.457	154.449	68.492***	0.530	20.639***
	1.193	1.176	1.186	1.193	1.176	1.186			

上段：平均値，下段：標準誤差 * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

(2) 自己調整学習能力の変容と選手の監督コンピテンシー認知各因子の2要因分散分析

選手の監督コンピテンシー認知の6つの因子（「信頼関係」「観察力」「生活指導」「自律性支援」「後援関係」「技術・戦術指導」）それぞれの得点を3分位法にて低・中・高群に群分けし、チーム発足時・チーム成熟期における自己調整学習能力の変容について2要因分散分析を行った。結果は表5のとおり、すべての因子において交互作用が認められた。また、図2～7のとおり、すべての因子において高群のみが有意に高く変容し、低群は有意に低くなっていた。

表5 自己調整学習能力の変容と選手の監督コンピテンシー認知各因子の2要因分散分析

選手の監督CP認知	チーム発足時			チーム成熟期			主効果F値		交互作用F値
	低群 (n=250)	中群 (n=254)	高群 (n=226)	低群 (n=250)	中群 (n=254)	高群 (n=226)	信頼関係	自己調整学習能力	
信頼関係	139.020	143.256	148.783	133.792	142.469	153.925	48.572***	0.191	19.775***
	1.191	1.182	1.253	1.191	1.182	1.253			
観察力	137.096	143.000	149.810	132.009	142.876	153.154	65.442***	0.857	13.006***
	1.231	1.178	1.168	1.231	1.178	1.168			
生活指導	137.222	144.812	146.010	132.841	141.699	148.208	33.126***	5.533*	10.127***
	1.394	1.662	0.949	1.394	1.662	0.949			
自律性支援	138.478	143.398	149.244	132.646	142.699	155.010	54.737***	0.144	22.535***
	1.245	1.082	1.307	1.245	1.082	1.307			
後援関係	138.389	144.416	148.746	135.191	143.831	151.761	38.442***	0.142	6.774***
	1.179	1.195	1.308	1.179	1.195	1.308			
技術・戦術指導	137.518	144.232	148.775	132.912	142.794	153.241	58.601***	0.617	16.285***
	1.184	1.237	1.174	1.184	1.237	1.174			

上段：平均値，下段：標準誤差 * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

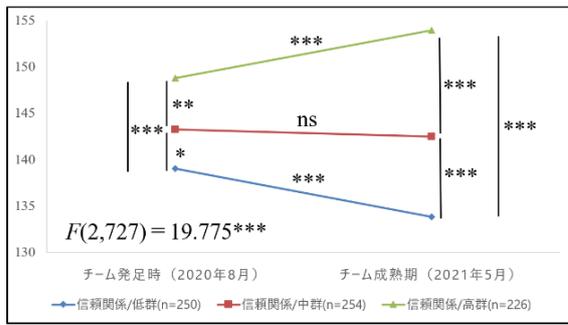


図2 自己調整学習能力の変容と信頼関係の2要因分散分析

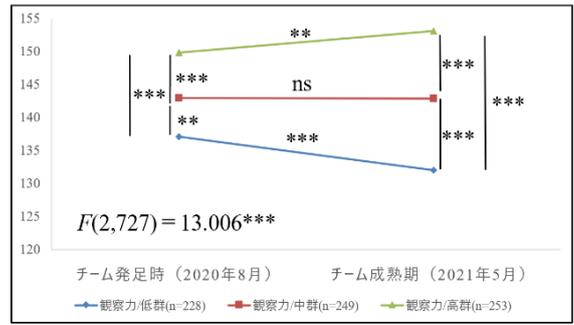


図3 自己調整学習能力の変容と観察力の2要因分散分析

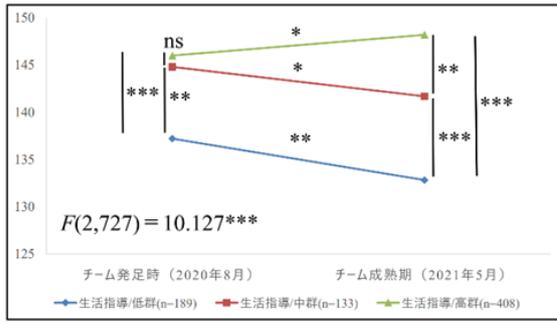


図4 自己調整学習能力の変容と生活指導の2要因分散分析

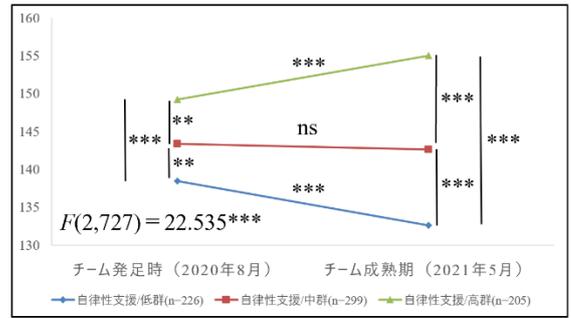


図5 自己調整学習能力の変容と自律性支援の2要因分散分析

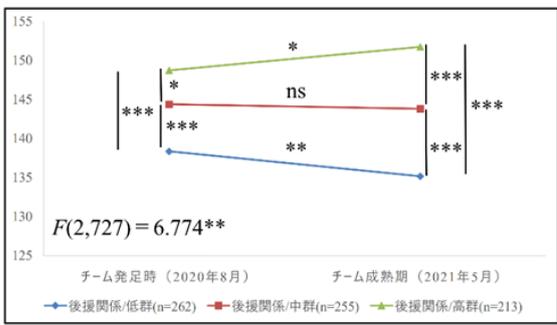


図6 自己調整学習能力の変容と後援関係の2要因分散分析

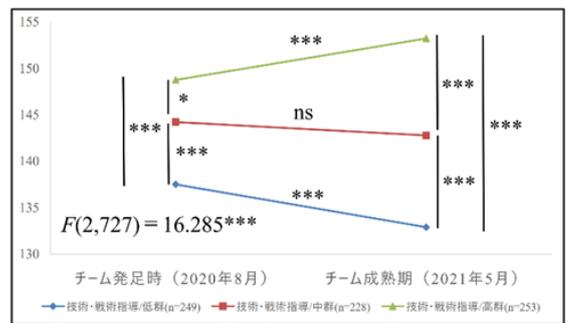


図7 自己調整学習能力の変容と技術・戦術指導の2要因分散分析

(3) 自己調整学習能力の変容とチーム内の立場の2要因分散分析

チーム内の立場（レギュラー、ベンチ入りメンバー、ベンチ外メンバー）とチーム発足時・チーム成熟期における自己調整学習能力の変容について2要因分散分析を行った。結果は表6・図8のとおり、どの立場においても有意差は見られなかった。

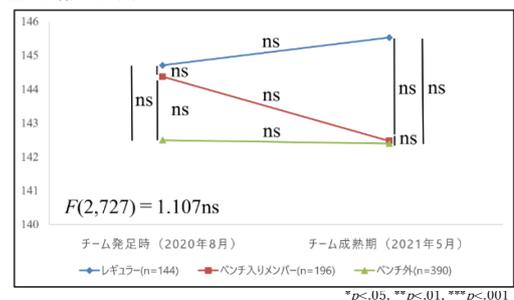


図8 自己調整学習能力の変容とチーム内の立場の2要因分散分析

表6 自己調整学習能力の変容とチーム内の立場の2要因分散分析

チーム内の立場	チーム発足時			チーム成熟期			主効果F値		
	レギュラー (n=144)	ベンチ入りメンバー (n=196)	ベンチ外メンバー (n=390)	レギュラー (n=144)	ベンチ入りメンバー (n=196)	ベンチ外メンバー (n=390)	チーム内の立場	自己調整学習能力	交互作用F値
自己調整学習能力	144.705	144.367	142.494	145.527	142.469	142.394	1.207	0.289	1.107
	1.643	1.321	1.050	1.643	1.321	1.050			

上段：平均値，下段：標準誤差

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

(4) 自己調整学習能力の変容と学年の2要因分散分析

学年（上級生、下級生）とチーム発足時・チーム成熟期における自己調整学習能力の変容について2要因分散分析を行った。結果は表7・図9のとおり、自己調整学習能力の変容については学年による有意差はなかった。しかし、学年間においてチーム発足期には5%水準だった有意差が、チーム成熟期には1%水準の有意差となっていた。

なお、チーム発足時の学年が1年生を下級生、2年生を上級生と表記した。

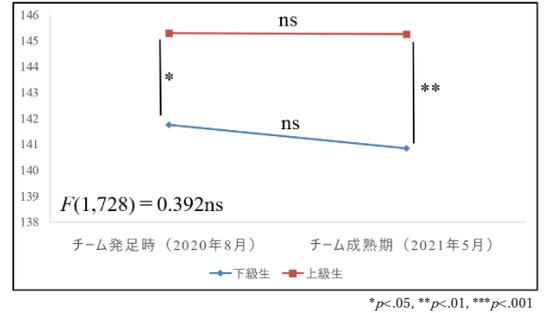


図9 自己調整学習能力の変容と学年の2要因分散分析

表7 自己調整学習能力の変容と学年の2要因分散分析

学年	チーム発足時		チーム成熟期		主効果F値		
	下級生 (n=366)	上級生 (n=344)	下級生 (n=366)	上級生 (n=344)	学年	自己調整学習能力	交互作用F値
自己調整学習能力	141.751	145.291	140.852	145.247	9.390**	0.476	0.392
	1.034	1.037	1.034	1.037			

上段：平均値，下段：標準誤差 * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

(5) 自己調整学習能力の変容とチーム運営決定権認知の2要因分散分析

選手のチーム運営決定権認知に関する29の質問項目の回答（1：完全に指導者主導～5：完全に選手主導）の平均値2.5未満を「指導者主導認知群」、2.5以上3.5未満を「中間群」、3.5以上を「選手主導認知群」とし、チーム発足時・チーム成熟期における自己調整学習能力の変容について2要因分散分析を行った。結果は表8・図10のとおり、「選手主導認知群」「中間群」は自己調整学習能力の変容に有意な差はなかったが、「指導者主導認知群」は有意に低くなっていた。また、チーム発足時には3群間において自己調整学習能力に有意差は見られなかったが、チーム成熟期には「指導者主導認知群」と「選手主導認知群」との間有意差が見られた。

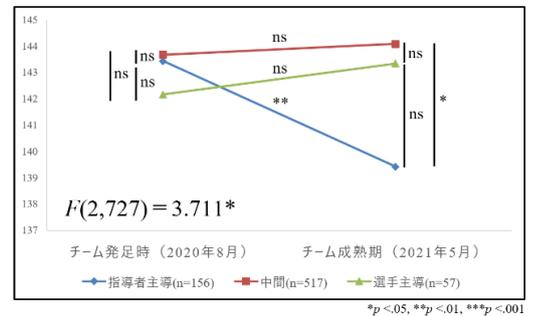


図10 自己調整学習能力の変容と選手のチーム運営決定権認知の2要因

表8 自己調整学習能力の変容と選手のチーム運営決定権認知の2要因分散分析

チーム運営決定権認知	チーム発足時			チーム成熟期			主効果F値		
	指導者主導認知群 (n=156)	中間群 (n=517)	選手主導認知群 (n=257)	指導者主導認知群 (n=156)	中間群 (n=517)	選手主導認知群 (n=257)	チーム運営決定権認知	自己調整学習能力	交互作用F値
自己調整学習能力	143.442	143.687	142.175	139.436	144.099	143.351	3.240*	0.407	1.332
	1.589	0.873	2.628	1.589	0.873	2.628			

上段：平均値，下段：標準誤差 * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

(6) 自己調整学習能力の変容とチーム成績の2要因分散分析

令和2年度における調査校の秋季及び春季大会のチーム成績別に3群分けを行った。秋季及び春季大会のいずれかでベスト8以上に進出した高校を上位群 (n=299)、ベスト16に進出した高校を中位群 (n=296)、それ以下を下位群 (n=135) とし、自己調整学習能力の変容について2要因分散分析を行った。結果は表9のとおり、交互作用が認められた ($F(2, 727) = 5.151, p < .01$)。また、図11のとおり、上位群は自己調整学習能力が有意に高く変容し (ともに $p < .05$)、一方、中位群は有意に低

くなっていた ($p < .05$)。下位群には有意差はなかった。

なお、チームの成績と選手の監督コンピテンシー認知について1要因分散分析を行ったところ、上位群は中位群・下位群より有意に高く ($p < .001$)、中位群は下位群より有意に高かった ($p < .001$) (図12)。

表9 自己調整学習能力の変容とチーム成績の2要因分散分析

チーム成績	チーム発足時			チーム成熟期			主効果F値		
	下位群 (n=135)	中位群 (n=296)	上位群 (n=299)	下位群 (n=135)	中位群 (n=296)	上位群 (n=299)	チーム成績	自己調整学習能力	交互作用F値
自己調整学習能力	139.356	145.716	143.217	137.074	143.426	145.361	6.999**	1.240	5.151**
	1.639	1.107	1.101	1.752	1.183	1.177			

上段：平均値、下段：標準誤差

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

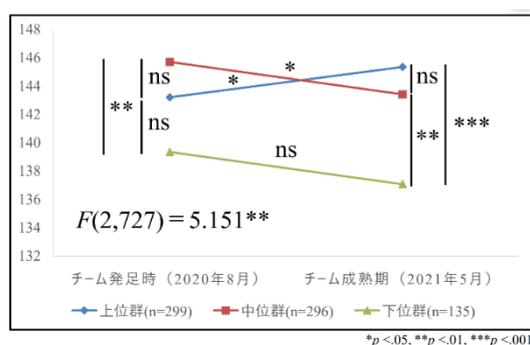


図11 自己調整学習能力の変容とチーム成績の2要因分散分析

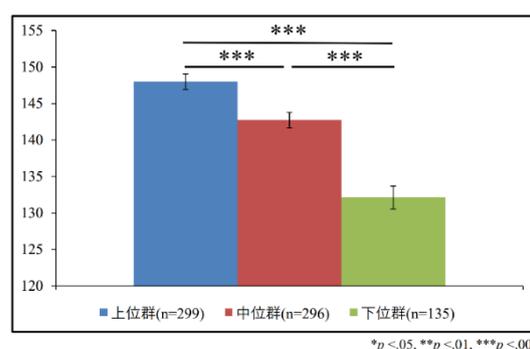


図12 選手の監督コンピテンシー認知とチーム成績の1要因分散分析

4. 考察

(1) 自己調整学習能力の変容と選手の監督コンピテンシー認知との関係

研究結果3(1)のとおり、高校野球において、監督コンピテンシーを高く認知している選手は自己調整学習能力が高まり、低く認知している選手は自己調整学習能力が低くなると考えられる。また、研究結果3(2)のとおり、すべての因子において同様の傾向が認められた。すなわち、高校野球において、監督から①よく観察してもらっている、②個に応じた技術・戦術指導をもらっている、③自律することを支援してもらっている、また、④監督と信頼関係が築けている等を選手が認知していることが、選手の自己調整学習能力の育成に繋がることが考えられる。

なお、研究結果3(3),(4)のとおり、チーム内の立場(レギュラー、ベンチ入りメンバー、ベンチ外メンバー)や学年(下級生、上級生)は自己調整学習能力の変容には影響しなかった。

高松・山口(2016)は、高校野球において、「監督が自分たちを見てくれている、自分たちが主体となって活動することを推奨してくれる、そしてプレー面について指導してくれている」と選手が認知することが、基本的心理欲求(「有能さ」「自律性」「関係性」)を媒介し、内発的動機づけに有意な影響を及ぼすことを報告している。岡田(2012)は、学習者が基本的心理欲求を満たされることで自己調整学習を進めていくための動機づけをもつようになると述べている。

以上のことから、チーム内の立場や学年に関わらず、選手が監督コンピテンシーを高く認知することが、選手の基本的心理欲求を満たし、自己調整学習能力を進めていくための動機づけを高めたと推察される。

(2) 自己調整学習能力の変容とチーム運営決定権認知との関係

研究結果3(5)のとおり、チーム運営に関して「指導者主導」と認知している選手は、自己調整学習能力が低くなる傾向にあった。デシ・フラスト(1999)は、統制的な指導の中では、自律性が育まれにくいことを指摘しており、戸山ら(2020)は、指導者の統制的行動が選手の基本的心理欲求の不満を高め、無動機づけを促進させる傾向を示唆している。つまり、チームの目標設定や活動策定、問題提起などを「指導者主導で行っている」と選手が認知している場合は、徐々に選手の自律性が奪われ、自己調整学習能力を低めていったと考えられる。

一方、本研究では、チーム運営を「選手主導」と認知している選手の自己調整学習能力には、有意な変容が見られなかった。また、「中間群」との有意差も認められなかった。先行研究において藤井ら(2019)は、「選手に運営決定権を委譲することは、選手の自己調整学習能力を高める有効な手段の一つ」としながらも、「選手に運営決定権を委譲するという方法だけでは選手の自己調整学習能力を高めることができない」との見解を述べている。深見・井上(2019)は、中・高生の運動部活動運営について、「チームの目標は指導者を含む部員全員で決定することを部員は高く評価している一方で、練習内容・方法については指導者を中心に決定することを部員は高く評価している」と報告している。すなわち、「選手主導」のチーム運営は、選手の主体性を尊重した教育方法である反面、選手自身の運営能力が問われ、大きな責任が課せられるといえる。そのため、選手の運営能力不足や指導者の適切な支援がなされないことで、表面的な選手主導運営に陥ったり、選手が不安感を抱えながらの活動になったりと自己調整学習能力の顕著な育成に至らない可能性が考えられる。

以上のことから、選手の自己調整学習能力を育成するためには、①「指導者主導」と選手に認知させないチーム運営を行うこと、②チームの運営決定は選手と指導者で合意形成しつつ、協働運営していくことが望ましいと考えられる。

(3) 自己調整学習能力の変容とチーム成績との関係

研究結果3(6)のとおり、上位に進出するチームの自己調整学習能力は有意に高く変容していた。自己調整学習は選手をより優れたパフォーマンスレベルへ到達させるために有効とされ(Toering et al., 2009; Kitsantas and Kavussanu, 2011; Dora et al., 2017)、本研究においても同様の傾向が得られた。自己調整学習能力が中位校は有意に低くなっており、下位校には有意な変容がなかったことから、上位に進出するチームは自己調整学習能力の高まりが影響している可能性が示唆される。

なお、チーム成績が高いほど監督コンピテンシー認知も有意に高かったことから、選手が監督コンピテンシーを高く認知していることがチーム成績に影響している可能性が示唆された。考察4(1)で述べたように、選手が監督コンピテンシーを高く認知しているチームは、選手の基本的心理欲求を満たし、自己調整学習を進めていく動機づけが高まり、チーム成績にもよい影響を与えたと推察される。

5. 結論

本研究の目的は、高校野球における選手の監督コンピテンシー認知が自己調整学習能力の変容に及ぼす影響を明らかにすることであった。その結果は、以下のようにまとめることができる。

高校野球において、

- (1) 監督コンピテンシー(「信頼関係」「観察力」「生活指導」「自律性支援」「後援関係」「技術・戦術指導」)を高く認知している選手は自己調整学習能力が高まり、低く認知している選手は自己調整学習能力が低くなると考えられる。

- (2) 自己調整学習能力の育成には、チーム内の立場や学年に関わらず、選手が監督の行動特性を肯定的に捉えるほうが重要だと考えられる。
- (3) チーム運営を「指導者主導」と認知している選手は自己調整学習能力が低くなると考えられる。
- (4) チーム成績には、自己調整学習能力の高まりと選手の監督コンピテンシー認知の高さが影響している可能性が示唆される。

本研究では、高校野球において自己調整学習能力を育成するためには、選手が監督コンピテンシー（「信頼関係」「観察力」「生活指導」「自律性支援」「後援関係」「技術・戦術指導」）を高く認知するための指導者行動が希求されている点を明らかにした。

課題として、選手が監督コンピテンシーを高く認知するメカニズムの解明には至っていない。そのため、選手から高く認知される監督の特徴を量的・質的の両面から検証することで、選手との人間関係づくりのきっかけや指導者として新たな指導観の獲得に繋がることが期待される。また、本研究では、質問紙調査によるデータを基に分析を行ったが、量的研究によって選手の自己調整学習能力の変容や選手の監督コンピテンシー認知を詳細に捉えることには限界がある。今後、選手・指導者へのインタビュー調査や指導現場でのフィールドワーク等を通じた質的研究によって、選手の自己調整学習能力の変容や監督コンピテンシー認知に関する知見が広がるであろう。

謝辞

大変多忙な時期にも拘わらず、本研究の趣旨に賛同し、協力してくださった選手・指導者の皆様に心より感謝申し上げます。また、執筆に際し、ご指導賜りました先生に厚く御礼申し上げます。

【引用参考文献】

- A, Kitsantas., and M, Kavussanu. (2011) Acquisition of Sport Knowledge and Skill: The Role of Self-Regulatory Processes. In Zimmerman, B. J., and Schunk, D. H. (Eds.) Handbook of Self-Regulation of Learning and Performance. New York: Routledge, pp. 217-233. (B・J・ジマーマン, D・H・シヤンク編/塚野州一・伊藤崇達監訳 [2014]「第14章 スポーツのスキルと知識の獲得: 自己調整プロセスの役割」自己調整学習ハンドブック. 北大路書房, pp.171-184.)
- 相川聖・高井秀明・大久保瞳・山崎博和 (2020) 心理サポートによる大学生アスリートの自己調整学習を促進させる試みーA 大学トランポリン競技部を対象としてー. 日本体育大学紀要, 49 : 3041-3048.
- 朝日新聞デジタル (2021) 高校の硬式野球部員数、7年連続で減少 13万4千人台. 2021年7月1日掲載記事. <https://www.asahi.com/articles/ASP715J2QP6ZPTQP008.html> (参照日 2021年9月8日) .
- Dora, Bartulovic., Bradley, W. Young., and Joseph, Baker. (2017) Self-regulated learning predicts skill group differences in developing athletes. Psychology of Sport and Exercise, 31 : 61-69.
- エドワード.L. デシ・リチャード. フラスト. 監訳. 桜井茂男 (1999) 人を伸ばす力 内発と自律すすめ. 新曜社.
- 藤井雅文・鈴木智晴・前田明・中本浩揮 (2020) 自己調整学習能力向上を目指した大学野球部 4年間にわたる活動事例: PDCA サイクルに基づいた実践報告. スポーツパフォーマンス研究, 12 : 622-654.
- 藤井雅文・鈴木智晴・村上光平・前田明・中本浩揮 (2019) 高校野球における自己調整学習能力と競技レベルの関係および指導スタイルの検討. スポーツパフォーマンス研究, 11 : 208-223.
- 深見英一郎・井上一彦 (2019) 運動部活動における指導者の主導性に関する意識と部員の形成的評価との関係. 体育学研究, 64 : 369-384.
- 古川久敬 (2002) コンピテンシーラーニングー業績向上につながる能力開発の新指標ー. JMAM コンピテンシー研究会
- 長谷川誠 (2016) 学校運動部活動における「体罰」問題に関する研究: 体罰を肯定する意識に注目して. 神戸松蔭女子学院大学研究紀要, 人間科学部篇(5) : 21-34.
- 長谷川祐介 (2013) 高校部活動における問題行動の規定要因に関する分析の試みー指導者の暴力, 部員同士の暴力・いじめに着目してー. 大分大学教育福祉科学部研究紀要, 35(2) : 153-163.
- 広尾晃 (2016) 野球崩壊 深刻化する「野球離れ」を食い止める!. イースト・プレス.
- 幾留沙智・中本浩揮・森司朗・藤田勉 (2017) スポーツ版自己調整学習尺度の開発. スポーツ心理学研究, 44(1) : 1-17.
- 今宿裕・朝倉雅史・作野誠一・嶋崎雅規 (2019) 学校運動部活動の効果に関する研究の変遷と課題. 体育学研究, 64(1) : 1-20.
- 石井英真 (2015) 今求められる学力と学びとはーコンピテンシー・ベースの光と影ー. 日本標準.
- 岩脇千裕 (2007) 日本企業の大学新卒採用者におけるコンピテンシー概念の文脈 自己理解支援ツール開発にむけての探索的アプローチ. 独立法人労働政策研究・研修機構, JILPT Discussion Paper Series : 1-35.
- Leapetswe, Malet., Graig, M. Chow., and Deborah, L. Feltz (2013) Influence of coaching efficacy and coaching competency

- on athlete-level moral variables in Botswana youth soccer. *Journal of Applied Social Psychology*, 43 : 2107-2119.
- ライル・M・スペンサー、シグネ・M・スペンサー著／梅津祐良ほか訳（2001）コンピテンシー・マネジメンの展開－導入・構築・活用. 生産性出版.
- 松田太希（2015）スポーツ集団における体罰温存の心的メカニズム－S.フロイトの集団心理学への着目から－. *体育・スポーツ哲学研究*, 37(2) : 85-98.
- 文部科学省（2013）運動部活動での指導のガイドライン. p.6.
- 文部科学省（2017）小学校学習指導要領（平成 29 年告示）.
- 文部科学省（2017・2019）特別支援学校学習指導要領（平成 29・31 年告示）.
- 文部科学省（2017）中学校学習指導要領（平成 29 年告示）.
- 文部科学省（2018）高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）.
- 元永知宏（2020）野球と暴力 殴らないで強豪校になるために. イースト・プレス.
- 長澤淑恵（2017）ソフトボールにおける女子チーム指導者のコンピテンシーに関する研究. *スポーツパフォーマンス研究*, 9 : 15-26.
- Nicholas, D. Myers., Deborah, L. Feltz., Kimberly, S. Maier., Edward, W. Wolfe., and Mark, D. Reckase. (2006) Athletes' Evaluations of Their Head Coach's Coaching Competency. *Research Quarterly for Exercise and Sport*, 77(1) : 111-121.
- Nicholas, D. Myers., Melissa, A. Chase., Mark, R. Beauchamp., and Ben, Jackson. (2010) Athletes' Perceptions of Coaching Competency Scale II-High School Teams. *Educational and Psychological Measurement*, 70(3) : 477-494.
- nikkansports.com（2020）部内暴力の佐野日大など 9 件処分「オフ増える傾向」. 2020 年 2 月 4 日掲載記事. <https://www.nikkansports.com/baseball/highschool/news/202002040000535.html>（参照日 2021 年 9 月 8 日）.
- OECD（2018）Education2030 Position Paper Japanese.
- 大峰光博（2019）運動部活動における指導者の体罰に関する研究：エーリッヒ・フロムの権威論を手掛かりとして. *名桜大学総合研究*(28) : 127-132.
- 大峰光博・友添秀則（2014）野球部における指導者の勝利追求への責任に関する一考察. *体育・スポーツ哲学研究*, 36(2) : 73-82.
- 岡田涼（2012）自己調整における他者.（自己調整学習研究会編「自己調整学習 理論と実践の新たな展開へ」第 4 章, pp.73-92）. 北大路書房, p.78.
- 岡田有司（2009）部活動への参加が中学生の学校への心理社会的適応に与える影響—部活動のタイプ・積極性に注目して—. *教育心理学研究*, 57 : 419-431.
- Phillips, M. B., and Jubenville, C. B. (2009) Student-athletes' perceptions of men's basketball head coaches' competencies at 15 selected NCCAA Division II Christian colleges. *Journal of Sport Administration & Supervision*, 1(1) : 39-51.
- Rycken D. S. and Salganik, L. H. (2003) Key competencies for a successful life and a well-functioning Society. (ドミニク・S・ライチェン, ローラ・H・サルガニク著／立田慶裕監訳（2006）キー・コンピテンシー：国際標準の学力をめざして. 明石書店.)
- 白松賢（1995）生徒文化の分化における部活動の影響. *子ども社会研究*, 1 : 80-92.
- スポーツ庁（2018）運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン. p.1.
- 角谷詩織（2005）部活動への取り組みが中学生の学校生活への満足感をどのように高めるか：学業コンピテンスの影響を考慮した潜在成長曲線モデルから. *発達心理学研究*, 16(1) : 26-35.
- 高田知恵子・田村宏・石淵真理子・藤永隆・下山定利・柚木仁・黒梅恭芳・丹野義彦（1987）部活動体験による青年期不適応について—事例検討—. *群馬大学医療短期大学部紀要*, 8 : 37-45.
- 高城佳那・三倉茜・小笠原悦子（2019）コーチになれるという自己効力感とスポーツ版自己調整学能力との関係—女子バスケットボール選手を対象として—. *スポーツと人間*, 3(2) : 43-49.
- 高松祥平・山口泰雄（2015）高校野球における監督のコンピテンシーに関する研究. *体育学研究*, 60(2) : 793-806.
- 高松祥平・山口泰雄（2016）高校野球における監督のコンピテンシーが選手の内発的動機づけに及ぼす影響. *体育学研究*, 61 : 461-473.
- 高橋豪仁・久米田恵（2008）学校運動部活動における体罰に関する調査研究. *奈良教育大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要*, 17 : 161-170.
- 竹村明子・前原武子・小林稔（2007）高校生におけるスポーツ系部活参加の有無と学業の達成目標および適応との関係. *教育心理学研究*, 55 : 1-10.
- 富江英俊（2009）体罰に関する意識と運動部活動経験との関連—体育教師志望者を対象とした調査—. *日本女子体育大学紀要*, 39 : 69-77.
- 富田幸博（2006）首都圏の地域スポーツ指導者に求められる職務遂行能力に関する研究. *日本体育大学紀要*, 35(2) : 159-172.
- 戸山彩奈・松本裕史・渋谷崇行・幸野邦男（2020）スポーツ指導者の統制的行動が女子大学スポーツ選手の動機づけに及ぼす影響. *スポーツ心理学研究*, Vol. 47, No. 1 : 1-11.
- Toering, T., Elferink-Gemser, M. T., Jordet, G., and Visscher, C. (2009) Self-regulation and performance level of elite and non-elite youth soccer players. *Journal of Sports Sciences*, 27 : 1509-1517.
- 上野耕平・中込四郎（1998）運動部活動への参加による生徒のライフスキル獲得に関する研究. *体育学研究*, 43 : 33-42.
- 梅澤秋久（2014）運動部活動における勝利追求主義とケア思想：桜宮高校の体罰事件とサッカーU17 日本代表「96 ジャパン」に着目して. *横浜国立大学教育学会研究論集*(1) : 71-81.
- 山崎雄大（2020）高校野球における体罰問題に関する事例の研究—高校野球経験のアンケート調査から—. *仙台大学大学院スポーツ科学研究科修士論文*(21) : 151-160.
- 安田勉（1999）体罰体験とその意識—大学生の意識調査から—. *青森県立保健大学紀要*, 第 1 号第 2 部 : 151-162
- Zimmerman, B. J. (1989) A social cognitive view of self-regulated academic learning. *Journal of Educational Psychology*, 81 : 329-339.